

使徒の働き

これはルカの福音書と二部構成になっているものの後半の書です
著者は同じくルカでパウロと宣教旅行を共にした同労者でした
これはルカが冒頭で私は前の書でイエスが行い始め教え始めたこと
を記しましたと書いていることから明らかです
彼はここでこれから何を書いていくかの手がかりを記しています
ルカの福音書はイエスが始めた行いと教えを書きましたが
この書ではイエスの行いと教えの続きを記しています
さてこの書のタイトルは使徒の働きですが
もともとその名前ではなく後の伝統でそうになりました
たしかに使徒たちはこの書のいろいろな箇所に登場しますが
物語の最初から最後まで繋ぎ合わせている唯一の登場人物はイエスであり
イエスは直接あるいは聖霊を通して働いているのです
ですからこの書はイエスと聖霊の働きというタイトルのほうがよかったかもしれません
この書の導入部ではよみがえったイエスが弟子たちに
神の国について教えながら過ごした40日について詳しく記されていて
これはルカの福音書からの続きになっています
イエスはそこでご自分がイスラエルから始めて
全世界の上に神の国を回復させると宣言し
イスラエルが彼に従って神の支配のもとで生きるように呼びかけています
そしてイエスはご自分の命を捨てることによって王になり
愛によって死に打ち勝ちました
使徒の働きはよみがえられた王イエスが弟子たちに
神の国でどう生きるかを教えるところから始まります
イエスは間もなく聖霊がやってきて
ご自身の臨在で弟子たちを満たすと約束しました
これはメシアの王国において神の霊が
新しい神殿に住み人々の中に臨在し
彼らの心を造り変えるという旧約聖書の要かなめとなる
希望の預言の成就になります
これが実現するとき弟子たちは力を受け
エルサレムユダヤサマリアそして世界の果てまで
私の証人となるとイエスは言いました
その後イエスは雲の中に引き上げられて見えなくなりました
これはダニエル書7章を思い起させ
イエスが人の子として苦しみのあとに王位につき

神と共に全世界を治めることを示しています
そしてイエスはいつの日か戻って来ると約束します
この書のメインテーマと構成の土台は
最初の章にすべて記されているのです
使徒の働きはイエスが弟子たちを聖霊によって導き全世界に遣わし
すべての国の人々をイエスの王国に招く物語です
まずエルサレムに良い知らせが宣べ伝えられるところから始まり
次にユダヤと非ユダヤ人が多い隣接するサマリア
そこから他の国々にそして最後は地の果てにまで宣べ伝えられていきます
このビデオはこの書の前半に焦点を当てます
エルサレムに焦点を当てたセクションは
イエスの弟子たちが五旬節を待っている場面から始まります
この時期さまざまな国からのユダヤ人巡礼者たちがエルサレムに来ていました
そしてついに聖霊が風のように弟子たちのもとにやって来て
各々の頭の上に炎のようなものが留まりました
すると彼らは神の偉大なわざをあらゆる言語で語り始めたのです
それは彼らが知らないはずの言語でしたが
そこにいた人たちには完全に理解できたのです
このシーンでルカが強調していることを理解するためには
これらのイメージが旧約聖書で登場する場面を知ることが重要です
まず風と炎は神の燃え盛るような栄光ある臨在が幕屋や神殿を満たしたことと
神の霊が来てメシアの王国の新しい神殿に住まうという
預言的な約束を表しているのです
使徒の働きでは神の炎のような臨在は
建物ではなく民の中に宿りました
預言書で約束された新しい神殿とは
イエスに従う新しい契約に基づく家族だとルカは言っています
また神が新しい神殿に住むために来られる時
イスラエルの部族はメシアなる王のもとに再結集し
神の統治を告げる良い知らせがすべての国々に広まる
という預言が成就したことも強調しています
ルカはさまざまな国に住むさまざまな部族からなるイスラエル人たちが
ペテロの五旬節のメッセージに応答したことを詳しく記しています
使徒たちはイエスをメシアとして認めるように人々に呼びかけ
何千人もの人がそれに応えたのです
そして惜しみなく与え合い神を礼拝し

喜ぶ共同体が生まれました
しかしすべての者が喜んだわけではありません
ルカはイエスの新しい共同体が早々に
エルサレムの指導者たちから敵意を向けられたことを書いています
ルカはシンメトリーの構成を用いて
二つの神殿の物語を書いています
神の新しい神殿であるイエスの信徒たちは
神殿の中庭や人々の家で集まっていました
そしてその間にペテロとほかの弟子たちが中庭で人々を癒やし
それが理由で捕らえられその都度ペテロが
イエスこそイスラエルの真の王であると宣言する話が挟まれています
これらの物語の真ん中にイエスの信徒たちが
財産や所有物を共有するために奉げ
貧しい人々を助けるという美しい話があります
この話は一見無作為にここに収められたように思えますが
実はこれはトーラーの中で教えられていたことで
エルサレムの神殿とその指導者たちを通して行われるべきことだったので
ルカの言いたいことは明白です
イエスの共同体という新しい神殿は
神がエルサレムの神殿に求め続けてきたことを行い天と地の接点となり
人々が神の寛大さと癒やしに出会う場所となるということです
この二つの神殿の対立は6章と7章で頂点に達し
最初の迫害の波がやってきます
イエスの信徒たちは増え続け新たなリーダーたちが必要になりました
その一人であるステパノは
イエスのことをエルサレムで大胆に宣べ伝える証し人でしたが
神殿を非難し脅かしたという理由で捕らえられました
ステパノはイスラエルの指導者たちが
神が遣わす預言者たちをいつも拒絶しイエスでさえ例外ではなく
今度はその弟子たちを拒んでいるのだということを延々と述べました
エルサレムの指導者たちは激怒してステパノを殺し
それを機にイエスの信徒たちに対する迫害を始めたため
信徒たちはエルサレムから逃げ出しました
しかしこれが逆説的な結果を生んだのです
ルカはこの災難がイエスの信徒たちを
ユダヤとサマリアまで送り出すことになったことを示しています

ルカはこのセクションでさまざまな物語を集め
ほとんどがユダヤ人でエルサレムを本拠地としていたイエスの共同体が
多民族による国際的な運動になっていく様子を描いています
まず最初にピリポによるサマリア伝道があります
サマリアはイスラエルに敵対していましたが
多くの人イエスに従う決意をしました
次に後にパウロとして知られるようになった
タルソのサウロの回心があります
彼はイエスの信徒を目の敵にして迫害していましたが
よみがえりのイエスと個人的に出会うと
イエスを情熱的に宣べ伝えるようになりました
続いてペテロが幻を見て神は非ユダヤ人を汚れた民とはみなさず
イエスの共同体に加わるに値しないとは思っていないことを
教えられた話があります
そこでペテロは聖霊に導かれてローマ兵の家に行くと
その家の非ユダヤ人たちはみなイエスの良い知らせに応答しました
そして聖霊が2章でユダヤ人であるイエスの弟子たちに臨んだ時と
同じように彼らにも激しく下りました
次にこの地域で一番大きく国際的な都市であるアンティオキアに
教会が設立される中でこの書のテーマがまた現れます
ルカはエルサレム教会のユダヤ人指導者であるバルナバが
パウロと共にアンティオキア教会を指導するために
出かけて行ったことを記しています
この教会は多民族からなる初めての大きな教会となり
イエスの信徒たちはここでクリスチャンと呼ばれるようになったのです
そして初めて外国への宣教師を遣わしたのもこの教会でした
この様にしてイエスから託された任務が現実のものとなってきています
それは本書の後半に記されていますがこのビデオはここまでです
これが使徒の働きの前半です

【要約】

「使徒の働き」は、ルカの福音書の後半に続く書で、ルカがパウロと共に宣教旅行を共にした同労者である著者によって書かれました。この書は、イエスの行いと教えの続きを記録しており、イエスの使徒たちが聖霊の導きで世界中に遣われ、新しい共同体を築く物語です。物語は、イエスの復活後 40 日間の出来事から始まり、彼が神の国を回復し、弟子たちを使徒たちとして派遣するというメッセージを伝えています。イエスの信徒たちは聖霊によって力を受け、世界中に遣われて国際的な運動を起こしました。この書では、非ユダヤ人もイエスの共同体に受け入れられ、異なる民族からなる教会が設立されました。

「使徒の働き」は、神の新しい神殿であるイエスの信徒たちが神の臨在を体験し、イエスの王国を宣べ伝える場所として描かれています。物語の中で、迫害や試練に直面しながらも、イエスの信徒たちは神の計画を遂行し、新しい共同体を築いていく様子が描かれています。この書の前半では、エルサレムを中心に起きた出来事が詳細に描かれ、聖霊の臨在や新しい神殿の概念が強調されます。さらに、ペテロ、パウロ、および他の使徒たちが異なる地域に宣教に行き、多くの人々がイエスの信者になる様子も描かれています。

「使徒の働き」の前半は、イエスの使徒たちが聖霊の導きに従い、神の国の拡大と新しい共同体の形成に尽力する過程を詳しく紹介しています。